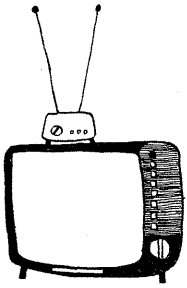
〝考えながら見る〟テレビ

工藤俊二

「直接体験を重視しているので、間接体験であるテレビは見せません」「家庭でテレビを長時間見ているので、園でまで見せるつもりはない」…。こういう保育現場の声を、ＮＨＫの幼稚園・保育所向け番組を制作している私はしばしば耳にします。事実、私たちの番組を視聴している幼稚園・保育所は減り続けています。放送が保育に絶対必要だとは私も思いませんが、放送を保育に取り入れることに対してある種の〝誤解〟があるとも感じています。本稿では、幼児番組の制作者が子どもたちに何を伝えようとしているかを述べていきます。そしてそれによって〝誤解〟が少しでも解消されるならば幸いです。

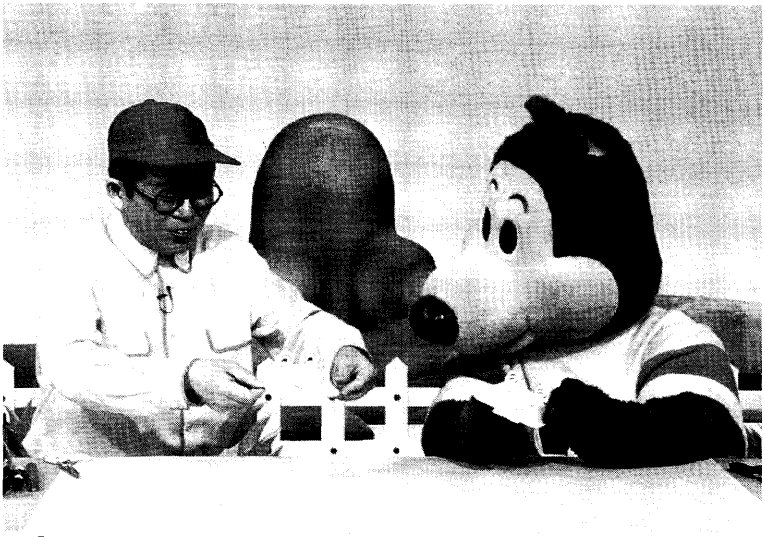


遊びを広げるきっかけとして

私の担当する『こどもにんぎょう劇場』『つくってあそぼ』『しぜんとあそぼ』『わたしのきもち』『お話でてこい』といった番組は、幼稚園や保育所で保育に利用していただくことを主眼に制作しています。保育に利用するといっても幼児番組ですから、教材である以前にエンターテインメントでなければなりません。たとえば『つくってあそぼ』は造

形（表現）分野の番組ですが、この番組を教材としてとらえた場合、作り方を理解し同じものが作れるだとか、はさみなどの道具が使えるようになるなど、技能や知識の習得がねらいとして挙げられます。

ですが、私たちはこの番組でそれ以上に大事にしていることがあります。それは、番組を見た子どもが自ら〝作りたい！〟と思ってくれることです。造形のアイデアは造形作家のヒダオサムさんが考えているのですが、私たちが打ち合わせで最初にそのアイデアを目にしたとき、〝へえー〟〝おもしろい！〟と感動するわけです。その感動をいかに番組で表現できるか制作者の腕の見せどころです。映像をどう積み重ねるか、ワクワクさんとゴロリという登場人物のやりとり（台本）をどうするかなど、さまざまな演出手法を駆使して造形の魅力を伝えようと努力します。〝おもしろい〟と思ってもらえて初めて、子どもの心を動かす（＝作りたい！）ことができる



▲『つくってあそぼ』より

からです。それができれば、番組としてはほぼ目的を達成したことになります。あとは放っておいても子どもが自分で動きだすでしょう。というよりも放送番組としてできることは実はそこまでで、その先は手出しができないというほうが正しいのですが。

つまり、テレビを見ることで子どもが自分で動きだしてほしい＝遊びを広げていってほしいというのが私たちの願いの一つです。テレビが間接的な体験だとしても、それを直接的な体験に結びつけてほしいという願いです。その直接的な体験は、『つくってあそぼ』のように視聴直後に出ることもあるでしょうし、人間関係をテーマにした『わたしのきもち』だったら一週間後か一か月後か、それとも何年も後になって出ることもあるでしょう。それにつながる〝タネ〟を番組に埋め込むよう、私たちは心がけています。蛇足ですが、私個人としてはテレビを見て心が動くということは、極めて直接的な体験だと思います。直接体験であっても、そこで子どもの心が動いていないとしたら、その体験にそれほど意味があるとは言えないのではないでしょうか。

コミュニケーションのきっかけとして

皆さんは職場の同僚や友人に、前夜に自分が見たテレビ番組の話をされることがあると思います。さらに、相手がその番組を見ているのと見ていないのとでは話の盛り上がり方が大きく違ってくることも経験されていませんか。裏を返せば、時間と場を共有していなくても、番組が互いの共通体験となりコミュニケーションが生まれるというわけです。

放送教育の現場ではほとんどの場合集団視聴ですから、そこでは子どもたちは時間と場も共有しています。視聴中は番組そのものを通してコミュニケーションが生まれます。内容に触発されてある子どもが思わず発言（ため息や笑い声かもしれません）し、それに引っ張られてほかの子どもが発言します。視聴後の活動では、たとえば『こどもにんぎょ

う劇場』の感想を伝え合う中で、自分が気づかなかったことに友達が興味をもっていることを知ったりします。『しぜんとあそぼ』で命のはかなさに触れたことで、飼育している生き物をみんなで協力して面倒をみていこうという気持ちが生まれるかもしれません。そうやって番組が媒介となって一人ひとりの気持ちがつながっていくことも、私たちの願いです。

「テレビを見るのに頭を使いたくない」

放送教育に熱心な幼稚園・保育所では、親子視聴を実践されているところが数多くあります。親子で一緒に番組を視聴し、遊ぶ（活動する）という形です。親子視聴を経験した保護者の感想は大きく二つにまとめられます。一つは、幼いと思っていたわが子が番組の内容をよく把握し、そこからさまざまなことを吸収しているのに驚いたというもの。そしてもう一つは、テレビの見方が変わったというものです。

私たちは、本（文章）の読み解き方を学校で習います。文章を読むときには頭を使うよう訓練されてきたと言い換えられるでしょうか。一方、テレビの見方は特に教えてくれません。これも言い換えれば、テレビを見るときは頭を使うよう訓練されてはいないということです。先述したように、放送番組は基本的にエンターテインメントですから、気楽な気持ちでのんびりと見るものだと、私も思います。『にほんごであそぼ』という番組で私が一緒に仕事をした放送作家が、あるディレクターとよもやま話をしていたら「世の中の人はテレビを見るときに頭を使いたくないと思っているに違いない」という結論に至ったのだそうです。そういうきらいはあると思います。長年テレビを見てきたということは、頭を使うように訓練されていないどころか、頭を使わないように習慣づけられてきたと言えるでしょうから。

ただ、放送を使った保育実践を拝見すると、子ど

もたちは実によく頭を使って考えながら番組を見ているのだと実感します。そのことに親子視聴の中で保護者も気づかれるゆえに、上記のような感想が出てくるのだと思います。そして自身も、頭を使ってテレビを見る有益性を認識するということなのでしょう。

ここで言えるのは、幼稚園・保育所での放送利用が、子どもたちの中にメディアを利用するときの基本的な姿勢を育てるということ、そして同時に大人（保護者だけでなく保育者も）のメディア利用への意識も変えるということです。番組に込められたメッセージや情報を的確に読み取って、自分の興味や関心と照らし合わせて行動につなげる（もしくは、つなげない）という、メディア・リテラシーの基本がここにあります。番組を利用することで、これからの（既に現在もそうですが）高度情報化社会に適応できる能力を育ててほしいというと言い過ぎですが、的外れな話ではないでしょう。

よりよく生きるために

最後に一つお尋ねします。皆さんは、何気なく見始めた番組に思わず引き込まれていったという経験はありませんか？

番組がきっかけになって、ある趣味を始めたり、ボランティアに参加したり、ひょっとしたら職業を決めるといった人生を大きく左右するようなことすらあったかもしれません。放送番組は、人が考え方を変えたり、よりよく生きようとすることを促す可能性を秘めています。

私たちは、幼児番組によって子どもが心を動かし、行動につなげ、人とかかわり、その子の人生がよりよいものになっていくことを願っています。そこにつながるように、楽しみながら頭を使って見ることで本当の魅力がわかる番組〝考えながら見る〟テレビ番組を作っていきたいと思います。

（ＮＨＫエデュケーショナル）